



私はいつも、一人ぼっちだ。

ガッコウの友達はお家に帰って、兄弟と話をしたり、遊んだりしている子がたくさんいる。

でも、私に姉妹はいない。家に帰ると、私はいつも一人だ。

ママは今日もお仕事に出かけている。帰ってくるのはいつも夕方、お空が紅く染まるまで帰ってこない。

駅前のスーパーでレジを打つ『ぱーとさん』というお仕事をしている。

学校から帰ってきてから、私はずっと一人で遊んでいる。人形さんとお話をしたり、ご本を読んだりして夕方までの長い一人の時間を過ごしている。

一人で過ごす時間はつまらない。話しかけても、誰も返事をしてくれはしない。お家の中を駆け回っても誰もいない。

『寂しい』とは思わない。

物心ついてからずっと一人だったから、一人で過ごすことには慣れている。でも、時々胸のあたりがすーっと寒くなる事がある。きつとつまらなすぎて、心がどこか遊びに言ってしまうのだと思う。

ガッコウの友達には妹を持つ子も多い。私にも妹がいたらこんな思いはしないですんだのかも知れない。

私は遊んでいた人形を持ったまま洗面所に向かう。そこには私の体全体が映るほどの大きな鏡がある。

鏡の中にはもう一人の私がいる。顔も髪型も、来ている洋服も同じ。まるで双子のようだ。

「そうだ、私に妹を作ろう」

誰もいない家で、私は呟く。私の小さな声はお家の壁に吸い込まれ、すぐに、本当に今お話をしたのかもわからないような静けさが広がった。

私は鏡の中の私に名前をつけた。

「私の名前がミヤだから、あなたの名前はヤミちゃん。私の妹よ」

私が話しかける。

「私の名前はヤミ。あなたの妹」

私が答える。

「そう、私たちは双子なの。だから顔も声も同じ。たまにけんかもするけど、仲良しなのよ」

「私とミヤお姉ちゃんは仲良し」

鏡の中の私が答える。静かな家の中。私の声だけが響く。

「今お人形で遊んでたの。いっしょに遊ぼう」

「うん、遊ぼう」

私は一人で、でも妹のヤミといっしょにお部屋に戻った。

二人で遊ぶのは楽しかった。二つのお人形でままごとをしたり、ご本をお互いに読みあいつこしたりして遊んだ。

今日はいつもよりも早く時間がすぎていく気がした。もうお空は紅く色を変えている。もうすぐママが帰ってくるころだ。

「ミヤただいま、いい子にしてた」

玄関の扉が開き、夕ご飯の材料の入った袋を提げたママが帰ってきた。

私は一人でママを迎えに行った。

「お帰りママ」

ママは私の頭をなでて優しく微笑んでくれる。

「ゴメンネ、すぐご飯の支度するからね」

袋を台所に置くとエプロンをつけて冷蔵庫を探る。

「さて、今日はなににしようかな。今日もパパは遅いみたいだから、ミヤとママだけ先に食べちゃおうね」

ママは冷蔵庫からお魚を取り出して準備を始めた。

「今日はミヤの好きなお魚だぞお」

「やったあ」

私はお魚が大好きだからすごくうれしかった。でも、心の奥ではお魚が食べたくないとも思っていた。コレは私の気持ちではない。

「ミヤはお魚好きだけどね、ヤミちゃんはお魚嫌いなんだって」

「ん、ヤミちゃんてだれ。ガッコウのお友達？」

ママは包丁を持ったまま首を傾げた。さっきできたばかりの私の妹だからママはヤミちゃんのことを知りません。私は妹のヤミちゃんのことをお母さんに教えてあげました。

「ううん、違うの。ミヤにはね、双子の妹がいるの。ヤミちゃんて言うの。双子だからミヤと同じ顔してるの」

ママは少し考えて、納得したように言った。

「そうなんだ、それならヤミちゃんもママの娘だね。ママもヤミちゃんに会ってみたいなあ」

ママは人差し指をあごに当てて私の方を見ました。ヤミちゃんはまだ私としかお話したことがないから、ママともお話したいんじゃないかなと思ったのでつれてくることにしました。

「うん、いいよ。ママちょっと待っててね」

ママは「はい」と言ってお料理を続けました。私はいったんお台所から出ると、再び戻り、ママの前に立ちました。

「こんにちは、私、ヤミです」

「こんにちは。ホントにミヤちゃんにそっくりね」

ママはミヤにやったように私の頭もなでてくれました。

「ヤミちゃんはお魚嫌い？」

「うん…あんまり好きじゃない」

私はうつむき、小さな声で言った。

「だ一め、好き嫌いはいけないわ。お姉ちゃんのミヤちゃんは大好きなんだから、ヤミちゃんも食べようね」

ママは下を向いた私の頬を両手で挟んで持ち上げると、私の目を見ながらそう言いました。

私は大好きなお魚をおなかいっぱい食べて、すごく幸せでした。

パパは今日もミヤがおきている間には帰ってきませんでした。

ミヤはパパも大好きなんだけど、最近全然遊んでももらえません。少し寂しいです。

次の日になりました。

ガッコウでは私に妹ができたことは秘密です。

なぜなら、ヤミちゃんはガッコウに行っていないからです。でもこのまま秘密にします。そうすれば、私がガッコウに行きたくないときだけ、代わりにヤミちゃんに行ってもらえるからです。ヤミちゃんは顔も声も同じだからきっと誰にも気づかれないと思います。

学校から帰ってくると、台所のテーブルにおやつプリンがありました。『今日もママはお仕事に行っているのでプリンを食べて待っていてください。』とお手紙がありました。

私はスプーンを出して一人でプリンを食べました。プリンは一個だけしかなかったの、ヤミちゃんの分はありません。

プリンを食べ終えたあと、今日もヤミちゃんといっしょにお人形遊びをして過ごしました。

それから毎日、私はお家に帰ると妹のヤミちゃんと遊びました。

たまにデザートも用意されていましたが、それは一人分しかなかったの、いつも私が食べました。

ヤミちゃんはおやつにはあまり興味はないのか、文句は言ってきませんでした。

ただ、ママが帰ってきてからは、ヤミちゃんがママとお話をしたがるので、ママとのお話はほとんどヤミちゃんが担当するようになりました。でも、ヤミちゃんとママの話は私も聞こえているので、全然寂しくはありませんでした。

今日もデザートのアイスクリームは一個しかありませんでした。

でも今日はすごく暑かったのです。食べているときは涼しかったのですが、食べ終わるとまた暑さが襲ってきます。冷凍庫の中にはもう一個アイスクリームがありました。でも、勝手に食べたなら怒られてしまいます。おやつは一日一個と決まられています。約束を破ったら大変です。

そこで私はいい事を思いつきました。

「ねえ、一個はヤミが食べたことにしてよ」

「うんいいよ」

聞き分けのいいヤミは、私の提案に素直に乗ってくれました。私はいそいそと、冷凍庫からもう一個のアイスを取り出して食べました。

夕方、ママが帰ってきて、冷凍庫を開けたとき、アイスがないことに気づきました。「ちょっと、ミヤ。あなた、今日アイス二個食べたでしょう。一日一個だけってアレほど行っているのに」

ママは角でも生えてきそうな勢いで、私をしかったです。でも私は大丈夫でした。「違うのママ。ミヤは一個しか食べてないの。もう一個はね、ヤミちゃんが食べたの」ママは困ったような顔をして言いました。「そう、それじゃ仕方ないわね。明日からはヤミちゃんの方も用意しましょうね」私は心の中でやった一と万歳をしました。

次の日から、お台所には二人分のおやつが用意されるようになりました。私はヤミにはもちろんあげないで、全部一人で食べました。いつも私が一人でおやつを食べても、ヤミは文句を言いませんでした。双子でも、私がお姉ちゃんだから偉いので、当たり前だと思いました。

しかし、ある日ママがお仕事から帰ってくると、ミヤを呼び出してこういいました。「ミヤちゃん、あなた、おやつをいつも一人で食べちゃってるんですって。ヤミちゃんと一個ずつって言うてるのに」

何でわかったのでしょうか。このことは二人しか知らないはずでした。もしかしたら、隣のおばちゃんが、私が二つともおやつを食べているのを見ていて、ママに告げ口したのかもしれない。なんにしても、ママは私のことをすごい大きな声でしかったです。

「ミヤには当分おやつ抜きよ」ママはそういってお部屋を出て行きました。私はおやつがもらえないことよりも、ママにしかられたことが悲しくて泣いてしまいました。

次の日から、台所のおやつはなくなりました。おやつがないので私はお部屋で遊ぶことにしました。

お部屋には、パパがお仕事で使っているパソコンがありました。パパはお仕事が忙しいので、毎日遅く帰ってきて、ミヤとはなかなか会えません。おうちにいるときもこのパソコンを使ってお仕事をすることが多いのでした。

パパは、私にはパソコンを触らせてはくれませんでした。私が触ると壊してしまうかもしれないと思っているのかもしれませんが。でも私だってパソコンぐらい使えると思います。いっぱいあるボタンをぼちぼち押せばいいのだから簡単です。

今日もおうちにはミヤしかいません。私はパソコンを使ってパパのお仕事をお手伝いしてあげることにしました。

パソコンはテーブルの上にあるので、スイッチを押すには椅子に乗らなくてははいけません。私は食卓からいつも使っている椅子を持ってきてその上に上りました。テーブルの上には開いたままのノートパソコンがありました。私はいつもパパがやっているようにボタンを押しましたが、画面は真っ暗のまま動きませんでした。どこかにスイッチがあるようです。私はパソコンを持

ち上げてスイッチを探しました。

ひっくり返して裏側を見ているときでした。私は手を滑らせてパソコンを床に落としてしまいました。

パソコンはすごい音をたててばらばらになってしまいました。お部屋のあちこちにひらがなの書かれたボタンが転がっていきます。

大変です。

私はあわてて椅子を降りて散らばったボタンを拾い集めました。そして落ちたパソコンにくっつけようとしたのですが、どこについていたのかわかりません。しかも画面はひびが入ってしまっています。これはセロテープでもくっつきそうにありません。

どうしよう。そう思った時、私はいい事を思いつきました。

「そうだ、ヤミがパソコンを壊したことにしよう」

そう思いつくと、まず隣のおばさんに見つからないようにカーテンを閉めました。

床に散らばったボタンをできるだけ集めて、元の形にはめ込みました。何個かはテレビの下に入ってしまったので、なんだかおじいちゃんの歯みたいに、ところどころが隙間になってしまいました。

画面はセロハンテープで止めてもやはり直りませんでした。

そのあとはできるだけパソコンから離れて遊びました。

夜、ミヤがお布団の中で眠りにつくころに、パパは帰ってきました。

私はすっかり眠気も覚めて、台所から聞こえてくるパパたちのお話に耳を澄ましました。

「ふー、今日も疲れたよ」

「お疲れ様」

「まだ少し仕事が残ってるんだ、パソコンを使うから、お茶を入れてくれないか」

パパの声を聞いたとき、私の心臓は飛び出しそうなほど、激しく脈打ちました。

「うわ、どうしたんだこれは」

家中に響くようなパパの声が耳に飛び込んできます。パソコンを壊したのはやはりばれてしまったみたいです。

「コレをやったのはミヤか。あいつはもう寝たのか」

パパはママの返事も聞かないで私の部屋に歩いてきました。パパの足音は私を襲いに来る鬼の足音にも聞こえました。

部屋のドアが開いて電気の消えた部屋に廊下の明かりが差し込んできます。

「ミヤ、おきてるか。ちょっと聞きたいことがあるんだ」

パパの声が頭のすぐ上で聞こえます。頭までかぶっていた布団がはがされ、私の上には覗き込むようにパパの顔があります。眠った振りは通用しないようです。私は昼間に練習した台詞を口にしました。

「パパ、違うの。私見たのよ。パソコン壊したのはヤミちゃんなの。勝手に触ってテーブルから落っことしたのよ。ミヤ見たもの」

私は必死に嘘をつきました。私の言葉を聞いてパパは何か考えているようです。

「そうか、ヤミがやったのか。あいつも一人でパソコンをやってみたいって言っていたからな。我慢できなかったのかもしれない」

パパはあっさりと納得しました。私がそれより驚いたのは、パパがヤミちゃんとお話をしたことがあることでした。

「パパはヤミちゃんとお話したの？」

「何を言い出すんだい、ミヤ。パパの娘なんだから当たり前だろ。あ、そうか、最近ミヤはパパが帰るころには寝てしまっているものな。ヤミはパパが帰る時間でもまだ起きていて、最近パソコンの使い方を教えてあげていたんだ」

ヤミがやったなら仕方がない。とパパは納得して部屋を出て行きました。

私はパパに怒られなくてすんだことよりも、ヤミがパパとパソコンをしていたと言う事実には驚いてしまいました。ヤミは私が作り出した私の分身です。私が寝ているときはもちろん寝ているはずです。なのにパパはヤミと話したと言いました。私は怖くなって布団を頭までかぶって眠りにつきました。

次の日、私は熱を出して学校を休みました。

ママがお仕事を休んで看病してくれました。今日は一人でうちにかくはなかったので、良かったと思いました。一人でいると、今にもどこかからヤミちゃんが出てくるのではないかと



怖くて仕方なかったのです。

その日は何事もなく一日が終わりました。熱も次の日には下がり、普通に学校に行くこともできるようになったのです。しかし、学校に行ったら私は驚かされました。友達に聞くと、休んだはずの昨日も、私は学校に登校していたというのです。

昨日、私は一日中お布団で寝ていたのですが、学校に行けるはずはありません。それなのに友達だけでなく、先生までがミヤは学校に来ていたというのです。

いったいどういうことでしょうか。これではまるで、本当にヤミがいるみたいです。

おうちに帰ってからも、私は部屋に誰かがいるのではないかと周りが気になって仕方ありませんでした。

いつもは気にならない風の音や、自分の足音までが怖く、私はベットにもぐったままで一日を過ごしました。

夕方になりママが仕事から帰ってきました。私は布団を飛び出して、すぐにママのところに駆けつけました。

「お帰り、ママ」

「ミヤちゃん、そんなにあわてて、いったいどうしたの」

どたどたと、玄関に駆けつけた私を見てママは驚いて言いました。

「ママ、私、昨日は学校に行かなかったのに、友達は私が学校に来ていたって言うのよ」

私は今にも泣き出しそうにママに訴えました。でもママは笑って言いました。

「あら、お友達も気づかなかったのね。昨日はミヤがお休みしたから、ヤミちゃんがミヤちゃんの振りをして学校に行ったのよ」

ママは当たり前のようにそう言いました。ヤミちゃんなんてホントはいないのに、学校にいけるわけがありません。でもママは「二人はそっくりだもんね」と本当にヤミがいるように話続けました。

私はママが夕ご飯を作っている間も、家の中を探し回りました。もしかしたら、本当にこの家にはヤミちゃんという子供が隠れているのかもしれない。二階から押入れ、おトイレ、お風呂まで探しましたが、やっぱりヤミちゃんを見つけることはできませんでした。

夕ご飯です。

食卓にはいつものように、私のご飯と、ママのご飯二人分しか用意されていません。やっぱり、この家にはママと私の二人しかいないようです。席に付いて私はママに尋ねました。

「ねえ、ヤミちゃんの名前は？」

「あら、そうね。ミヤちゃん、ちょっとヤミちゃんを呼んできて頂戴」

そういわれたので、私はまた一人で家の中を探し回りました。しかし、どれだけ探しても家の中にはヤミちゃんの姿は見つかりませんでした。

私は仕方なく一人でママのいる台所まで戻りました。ママは私が戻ると「ほら、ヤミちゃんもうご飯よ」と私に言いました。

私はミヤなので「違うわ、私はミヤよ」と言いました。ママは私とヤミちゃんはすごく似ているので、間違えてしまったのだと言いました。私が探したけれど見つからなかったことを言うと。ママは「きっとおなかがいっぱい食べたくないんでしょう。私たちだけで食べましょう」と言いました。

やっぱり、ヤミちゃんは存在しないのでしょうか、だんだん私はわからなくなってきました。

その夜、私は考えました。

私が考え出した妹がだんだん、現実になってきている。このままでは、いつ私の目の前に『ヤミちゃん』が現れても不思議ではありません。私はヤミちゃんには消えてもらうことに決めました。

ヤミちゃんは死んじゃったことにしてもかまわなかったのですが、それではあまりにもかわいそうなので、誘拐されて、どこかに連れて行かれてしまったことに決めました。明日ママが仕事から帰ってきたら、もうヤミちゃんはいないことを言おうと決めました。そう思うと、少し安心して、ゆっくり眠ることができました。

次の日、私はいつものように学校に行き、おうちに帰ってからは一人で遊んで、ママが帰ってくるのを待っていました。

お空が紅くなってくるころになると、いつものようにママが帰ってきました。

「ただいま」

私は遊んでいた人形を置いて、玄関まで迎えに行きました。

「お帰りママ」

「ただいま、ミヤ。今日もヤミちゃんと遊んでいたの？」

ママの質問に、私は用意していた答えで言いました。

「ううん、今日は一人で遊んでいたの。ヤミちゃんはね、もういないの」

「いないって、いったいどうして」

ママは不安そうに私の顔を覗き込みます。

「ヤミちゃんはね、連れてかれちゃったの。学校の帰りにね、白いお車に乗ったおじさんたちにヤミちゃんだけ連れてかれちゃったの。だからもうヤミちゃんはいないの。ママの子供はミヤだけになったの」

私は楽しく笑いながらそういいましたが、ママは怒った顔で私に言いました。

「ミヤ。本当なのね、ヤミはどこで誘拐されたの。どんな犯人だったの、ちゃんと答えなさい」

ママが怖かったので、私は適当に嘘を言いました。学校を出てすぐの八百屋さんの前で、二人のおじさんに連れて行かれたと、ママに言いました。

ママはあわててパパに電話をかけました。ママは泣きそうになりながら、パパに電話をかけています。

「…やっぱり警察に言ったほうがいいかしら、ええ、ええ、早く帰ってきてね」

電話を置いたママは、落ち着かずに部屋の中を行ったり来たりしていました。

「ママ、私おなかすいたよ」

私はヤミのことなどどうでもよかったので、夕ご飯が食べたいとママに訴えましたが、ママは上の空で、私のいうことなど聞いてくれませんでした。

それから、そんなに時間も経たないうちに、会社からパパも帰ってきました。

パパが帰ったのに気づき、ママはパパに駆け寄り、鳴きそうな声で訴えました。

「あ、あなた。ヤミが、ヤミが…」

「落ち着け、大丈夫だ。さっき警察にも連絡しておいた。」パパは震えるママを抱きしめながら言いました。「ほら、あの角に黒い車が止まっているだろう。あの車に刑事さんたちが乗って待機してくれている。犯人に警察に知らせたことがばれるとヤミの身が危険にさらされる可能性があるから、あそこから見張っていてくれるそうさ」

私も窓から確認すると、確かに車が止まっています。車の中は見えないけど、きっとあの中でのはずもないヤミを連れ去った男たちを捜す相談でもしているのだと思いました。

でも、お巡りさんまでヤミを探すとすると、困ったことになってきました。私が嘘を行っていることがお巡りさんたちにばれてしまったら大変です。もしかしたら、逮捕されてしまうかもしれません。

ヤミがいなくなってうれしい気持ちはどうに消えて、私の中には不安と後悔が押し寄せていました。

「ちよっとのどが渴いたな、 水を持ってきてくれないか」

パパに言われて、ママはお台所にお水をとりに行きました。

私はこれ以上嘘をついてはいけないと思いました。もう本当のことを言おう、そう思ったとき

うちの電話が大きな音で鳴り響きました。静まりかえったお部屋に響くベルの音は、私を攻めているようで、怖くなりました。

ママがあわてて台所から戻ってきました。手には空っぽのままのコップを持っています。お水を汲むのも忘れて戻ってきたようでした。

「あなた…」

ママは震えながらパパを見ます。私もパパを見つめ、それからまだなり続ける電話機に目を移しました。きっと間違い電話です。誘拐犯なんていないんだから、電話がかかってくるはずはありません。でも、それを知らないパパは緊張した顔でゆっくりと受話器を持ち上げました。

「…もしもし…」

しばらくの沈黙。そして「や、ヤミは無事なんだろうな。声を、声を聞かせてくれ…」

私もママは手を握り合って、受話器を握り締めて、時に声を荒げながら話すパパを見ていることしかできなかった。

「…ま、待ってくれ、そんな金はない。待て、切らないでくれ」

叫ぶように訴えたパパだったけど、受話器を握ったまま小さく震えてその場に立ちつくしていた。

「あなた、今の電話は、、、」

「ああ、犯人からだ。ヤミを返してほしかったら一千万円用意して八時にうちの近くの橋の上までもってこいというんだ」

「一千万円だなんて、そんなお金…それに時間ももうほとんどないじゃない」

ママは今にも倒れそうになって、壁にもたれかかった。パパもママもあまりの金額の大きさに驚いているようでした。でも、私はそんなことよりも、犯人から電話があったことのほうが信じられませんでした。

ヤミなんてホントはいないのです。存在しない人間は誘拐されるはずがありません。誘拐されたと言うのも私のついた嘘。それなのに実際に犯人からの電話がかかってきた。と言うことは、私の知らないところでヤミは実際に存在しているのかもしれない。

「大丈夫だ。お金は何とかして、必ずヤミは助け出す。私に任せておけ」

私の不安げな表情を、ヤミを心配するものだと勘違いしたパパは、私の頭をなでて話しかけてきた。

「今の電話のことと、身代金について刑事さんと相談してくるよ」

パパは立ちあがり部屋を出ようと扉に手をかけた。

どうしよう。もし、本当に誘拐されているヤミが無事助けられてこの家にやってきたら。パパとママは自分たちの娘だと疑っていない。私だけが本当はヤミなんて娘は存在しないことを知っている。このままパパを行かせては行けない。わかってもらえなくても、私のついた嘘を正直に打ち明けて、得体の知れないヤミなんて物を助けるためにお金なんて払わないでと言おう。

私は心を決めてパパの手をつかんだ。

「待って、パパ。行かないで。嘘なの、ヤミが誘拐されたなんて嘘なのよ」

「何を言っているんだミヤ。ヤミは今も犯人のところでパパたちの助けを待っているんだよ。早

く助けに行ってもやらなくてはいけないんだ。いい子だからおとなしく待っていておくれ」

パパは優しく私の頭をなでながら話した。

「違うのよ。誘拐のことだけじゃないの。ヤミはね、元々いない子なの。私が作った空想の妹なの。だから誘拐されるわけもないし、そんなものにお金を払う必要もないの」

私の言葉をパパとママはびっくりしたような顔で聞いていた。私は二人の表情をみあげながら、大粒の涙を流した。

しかられるかもしれない。でも、このまま嘘をつき続けたら取り返しのつかないことになるかもしれない。そんな予感がしていた。

私は体を小さくして、怒られる覚悟を決めた。

しかし、次に訪れたのは私を包み込むやさしい抱擁だった。

驚いた私が顔を上げると、そこには両親の優しい笑顔があった。

顔をあげた私の体から腕をほどくと、パパは私の肩に手を置いて言った。

「ミヤ、やっと自分の嘘を認めてくれたね」

不思議な表情の私に、ママは目の前にしゃがみこんで話し出した。

「ミヤから最初に妹のヤミちゃんの話がされたときは、一人で寂しいのだから仕方がないと思って、話をあわせていたのよ。でもあなたはそれをいいことに二人分のおやつをねだったり、パソコンを壊した悪いことを全て妹のヤミちゃんのせいにしたでしょ。だからね、パパと相談して本当にヤミちゃんがいるように演技をしていたの」

「パパたちがヤミの方をかわいがれば、ミヤが本当のことを話してくれるようになるんじゃないかと思っていたんだ。ごめんよ」

パパはもう一度大きな腕で私を抱きしめてくれた。

緊張の糸の切れた私はその場で泣き出してしまいました。

「でも、でも、誘拐犯から電話がかかってきたのよ、警察の人も来てるって言ったじゃない」

「ああ、あの電話はママが台所から携帯電話でうちに電話を掛けただけなんだよ。あの車も刑事さんじゃない、ただの路上駐車だよ」

パパはママと顔をあわせて微笑みあっている。でも、学校のことは・・・

「じゃあ、学校は？私が休んだときもみんなは私が登校してたって言ってたわ。あれは私の振りをしたヤミが学校に行ったって思ってたけど、あれもパパが何かしたの」

「何のことだい、そんなことはしていないが」

パパは首を傾げるが、ママは私に言いました。

「それはきっと、私たちがヤミちゃんがいるように振舞っていたから、ミヤもヤミちゃんがいるものだと思い込んで見た夢だったんじゃないかしら。現実にはヤミちゃんはいないのだから、そんなことがあるわけないでしょう」

「夢、なのかな」

確かにあの時は熱でうなされていたし、ヤミのことばかりを考えていたから、夢と記憶がごっちゃになっているのかもしれない。

「そうよ、夢。あなたはちゃんと嘘を認められるいい子になったのよ。だましたりしてごめんなさいね。今夜はお外にご飯を食べに行きましょう。ミヤの大好きなハンバーグがいいかしら？」

その言葉に私の不安は吹き飛んでしまいました。

ヤミはいないのです。やっと私も安心することができます。

パパとママはお出かけの準備を始めました。パパはすぐに終わりましたが、ママはいつものように時間がかかります。お化粧品やお洋服を選ぶのが大変なのです。

いつも行くハンバーグ屋さんは、おうちから歩いてもそんなにかかりません。おなかも空いてきましたはまだ我慢できるので大丈夫です。ハンバーグ屋さんはおうちのそばの橋を渡ったらすぐ目の前にあります。

おうちを出た私たち家族は、近くの川にかかる橋を渡ります。その向こうには夜なのにすごく明るいハンバーグ屋さんが見えています。

うきうきする私達に誰かが後ろから声を掛けてきました。その声はまるで私が話したかのよう

にそっくりです。

「お、お父さん。お母さん・・・」

のどから搾り出すような、私と同じ声。そう、ここは、この橋はヤミの身代金受け渡しに指定されていた橋。

私たちはゆっくりと振り返りました。そこには首にくっきりと縄で絞められた跡を残し、全身をびしょぬれにした私と同じ姿の少女が顔面を蒼白にして立っていました。

パパは自分の腕時計を確認しました。時計はとっくに身代金受け渡し時間をすぎています。

「ミヤちゃん、何で助けに来てくれなかったの、私、殺されちゃったのよ」

ヤミがゆっくりと私たちに近づいてきた。そして・・・

おわり